

● シリーズ 私の見た日本 Vol.180

環境建築における文化的つながり

Shaily (シェリー)

インド・デリー生まれ。インド・パンジャブ州にあるチトカラ大学建築学部5年生。2018年に初来日。2019年3月から半年間東京に住みながら、交建設計でインターンシップ中。



私が通っているチトカラ大学はインド・チャンドーガル市にあり、ル・コルビュジエが設計した都市計画で有名な街です。この街に住んで、建築と自然環境の調和によってどう働き方が改善されるかに興味を持つようになりました。私が建築と環境の調和が仕事場の風通しや仕事の効率を上げることに関係していることを初めて感じたのは、2018年9月に東京理科大学でインドの建築学部仲間と共同研究プロジェクトを行ったときでした。

インド大都市圏では急激な人口増加が自然環境破壊につながり、コンクリート・ジャングルになってしまった風景をとて悲しく感じています。この問題の解決法を探るなかで、人の生活条件を改革させるTOD (Transit Oriented Development) の理論を発見しました。これに関して東京は世界の大都市のなかでも一番効率的な交通設備が整っており、都市全体に歩行者優先設計法POD (Pedestrian Oriented

Design) が行きわたっています。この統合された公共交通機関ネットワークは利用者優先で設計されています。交建設計でインターンをするなかで、建物を設計するうえで二つの重要なことを学びました。一つ目は空間と周りの環境との調和によって地球環境の破壊を防ぐ、いわゆるサスティナビリティを意識すること。二つ目は日常と災害時のいずれにおいても、利用者が感じる不便さを極力少なくすることです。以前来日した際は10日間の短い滞在期間であったこともあり、「日本の建築」—建物全体が人の生活や文化に刺激を与える建築—を感じるには短すぎたため、半年間の予定でインターンとして日本に戻ることにしました。

日本の伝統建築を体験するため千年の都である京都に向かった際、伝統的なつくりの木造建築物や美しい仏像、清々しい庭がとても魅力的でした。桂離宮では一つ一つの敷石

を踏むたびに庭の池や茶室といった風景が変化していくのを味わえることに予想以上に感動しました。建物のどの場所においても幸福感をえられ、空間に生命を与えることが建築家の最大の目的だと実感しました。

このような現象はインドでも存在し、文化財保護活動で日本とインドは伝統的に深い関係があります。この国家間の文化交流は、古代に発生してアジア大陸を渡った仏教という共通点もあり、現代でも続いています。2014年に京都市とインド・ヴァラナシ市は重要文化財を保護しながら近代的都市開発をする協定を結びました。両国の文化の共通点をつなぐことによって、有形、無形の文化の価値を共有する試みです。

この文化的共通点は、個人的な日常生活のなかにもあります。例えば、寺や神社で幸福を祈ることの重要性はインドでも同じであり、また、都会では年中自然を味わえる唯一

のスペースでもあります。

自然に囲まれた京都の清水寺や金閣寺では、日本の四季の美しさを味わえます。インドでも日本と同様に、春夏秋冬に合わせた生活を営む文化があります。日本の春のお花見と、インドの春の訪れを祝い色粉や色水を掛け合うホーリー祭には、人々の間に一体感が生まれ、喜ばしい雰囲気にも包まれるという共通点があります。

東京の桜やさまざまな花が咲く道や公園を歩くとき高揚し、快適な気分を味わえます。春以外にも一年中植物が多い歩行者優先の通りを渡ると多忙な一日のストレスから開放されます。このように人の気分の改善につながる、パブリックスペースにおける歩行者を優先に考えた設計は非常に大事であると思います。パブリックスペースの重要性とそこでの経験が社会を豊かにするということがわかり感心しました。

このようなスペースで時間を過ごすことは、くつろぎや人との交流、そして楽しみをもたらします。日常生活では会社の人と一緒に花見や居酒屋に行ったり、シェアハウスの友達と過ごしたりすることで同様の感覚が味わえます。以前、東京のアーバンスペースを体験するため、同僚らと丸の内線の東京駅から新宿の東京都庁舎までの建築物を見学するウォークラリーを行いました。14kmの散歩コースのなかで、21_21DESIGN SIGHTや国立新美術館、東京国際フォーラムなどの名建築物を見たことで、建築家のデザインが五感を刺激し、人の感情や精神に直接影響を与えることが理解できました。特に国立新美術館はほかの美術館とは異なり、「空の美術館」とも考えられます。その「空」の空間では臨時的展示が行われ、逆コーン型の構造体のてっぺんにカフェやレストランがあります。自然光で全面に照らされた大きい空間は軽い感じがし

て、建物の全空間をよりはっきりと味わえました。とても大きなガラスのファサードは屋外と室内をつなぐ役目を果たし、利用者はこの大きいスペースを自由に歩き回り、人それぞれ独特な体験ができます。最後に東京都庁舎の展望台に着き都市全体の眺めを味わったとき、ラリーの達成感でほっとしました。

人々は1日平均7~8割を室内で生活しており、室内環境は人の働き方だけではなく暮らしにも深く影響しています。日本とインドの働き方には異なる点が多々あるのですが、私は日本人の忍耐力の強さと組織だった働き方といった良い点を、これからも学んでいきたいと考えています。

(翻訳/エバレット・ベンジャミン)



アーバンスペースと自然環境との調和

上/桂離宮の爽やかな風景
下/静かで平穏なたずまいの金閣寺

東京国際フォーラムの外で自然光に囲まれたパブリックスペース



自然光に囲まれた国立新美術館の内装。広いオープンスペースは利用者にとって動きやすい

上/国立新美術館
下/東京都庁舎からの風景